



KAAT 神奈川芸術劇場芸術監督トーク
 『SHIRAI's CAFÉ』 Vol.7
 レポート

2019年6月1日(土)
 KAAT 神奈川芸術劇場 1F アトリウム
 芸術監督：白井晃(演出家・俳優)
 ゲスト：曾我大穂(ミュージシャン)

KAAT 神奈川芸術劇場・白井晃芸術監督が、演劇や音楽のことをゲストのミュージシャンと語り合う企画。第7弾のゲストは、フルート・ハーモニカ・カヴァキーニョ・スティールパン・鍵盤楽器・テープレコーダ他様々な楽器を操り、世界を又にかけてながら新しい演奏スタイルを試みる音楽家・曾我大穂さんです。実は白井と曾我さんは、本日が初対面。どのようなお話が繰り広げられるのか、期待が膨らみます。



『SHIRAI's CAFÉ』の会場はKAAT 神奈川芸術劇場エントランスに広がる1F アトリウムです。白井が今回の企画について、お客様への説明をしていたところ、アコーディオンの音楽と共にその姿が2階の大階段上に現れます。ホイッスルを加えながら、一步一步階段を下り、お客様の間を通りながらその姿が1階客席に。途中、子供達にあめを配ったりも

しています。椅子に着いた曾我さんは、まず自ら所属するユニット「仕立て屋のサーカス」のご紹介を。そうこうしているうちに、ホールで上演中の劇団四季『パリのアメリカ人』が終演。大勢のお客様がエスカレーターで下りてきます。熱心にカフェへ呼び込みながら、お客様に予め募集したメッセージを白井が読み、そこに曾我さんが即興で音楽を奏するという試みを披露。今年の5月、「全くどこの国でもない言葉で感情を読み上げ、そこに音楽を併せる」という試みしてみたところ、非常に面白かったと語る曾我さん。そこ





から本日のアイデアを閃いたのだそうです。

「木漏れ日」「将来について」「自分が観た舞台」等と、まったく関係性のない言葉を次々に発していく白井。中には自作の和歌を投稿したお客様も！しかしそこに違和感はなく、音と言葉の新たな融合をお客様と共に楽しんでいる雰囲気です。そして、その言葉がやがて唄となっていきます。一

見すると、とても即興で演じているとは思えない程のコンビネーションを発揮するパフォーマンスに魅せられます。

そして、2人のトークが始まります。もともと音楽を志していたわけではない曾我さんですが、高校卒業と同時に全国放浪の旅に出ることになり、4年間もほぼ路上生活をしてきたとの仰天エピソードが飛び出します。「若気の至り」で寒いときは北に赴き、図書館の影に身を寄せて暮っていたのだとか。また、お母様が考古学をされていた影響もあり、行く先々で発掘のアルバイトをしながら毎日をつなぐことも。しかし、旅の中でジャグリングに出会い、そしてハーモニカ等の楽器に出会い、やがてそれが自身の稼ぎの足しになっていきます。



曾我さんが持ってきた、見た事もない楽器、というか「音が鳴るもの」の説明を受ける白井。思わず「曾我さんは何の演奏者ですか？」との問いかけに「ハーモニカが得意です」とのあいまいな答えに苦笑い。

次の試みは、白井が用意した短編に、曾我さんが即興で演奏するというもの。用意されたのは、19世紀を代表するアメリカの作家、ナサニエル・ホーソーン（Nathaniel Hawthorne）の短編「ウェイクフィールド」。20分程の朗読に、次から次へと音楽を繋げていく曾我さん。その姿に新たなクリエイションの可能性を見出しているようにも見えます。

そして今回のメインイベントというべき新しい企画が始まります。大スタジオで上演中の舞台「恐るべき子供たち」の舞台美術で使用された白いセロファン状の幕をお客様の上に覆い、その世界を体験していただくというものです。



繭の中に入り込んだような空間に、曾我さんの音楽が響き、何とも不思議な体験を味わいながら、カフェはクローズしてしまいました。

撮影：新江周平